

ノーベル賞の国際政治学

——ノーベル文学賞と日本、谷崎潤一郎をめぐる推薦と選考 1958～1965年——

吉 武 信 彦

International Politics of the Nobel Prize:

The Nobel Prize in Literature and Japan, the Nomination and Selection of Junichiro
Tanizaki 1958-1965

Nobuhiko YOSHITAKE

要 旨

本稿は、ノーベル文学賞に推薦されていた日本人候補者、谷崎潤一郎をめぐる推薦と選考の状況を考察する。谷崎は、1958年から1965年まで7回、同賞に推薦されていた。誰がいかなる理由により谷崎をノーベル文学賞に推薦していたのであろうか。また、ノーベル文学賞を選考するスウェーデン・アカデミーにおける谷崎の評価はいかなるものであったのであろうか。

1968年に川端康成が日本人初のノーベル文学賞受賞者となった。現在では1968年のスウェーデン・アカデミーの史料も公開され、川端の受賞に至る選考過程が徐々に明らかにされつつある。この川端の受賞を理解するためには、川端のみに注目するのではなく、1958年以降の約10年間の日本人候補者をめぐる選考に注目する必要がある。1965年に谷崎は亡くなるが、それ以前においては谷崎が選考において有力候補者に位置づけられていた。川端は谷崎死後に有力候補者となっている。この背景には、1950年代中葉以降、谷崎、川端、さらに三島由紀夫の作品が次々とドイツ語、英語、フランス語、スウェーデン語などに翻訳されていたことがある。これらの翻訳作品、さらに翻訳を行なったアメリカ人研究者らの助言を得て、この期間、スウェーデン・アカデミーは日本文学について情報を蓄積し、徐々に理解を深めていったのである。スウェーデン・アカデミーが日本人作家を本格的に取り上げ始めたとき、谷崎の文学はスウェーデン側にいかに映っていたのであろうか。

キーワード：谷崎潤一郎、『細雪』、ノーベル文学賞、スウェーデン・アカデミー、アンデシュ・ヨーハン・エステルリング

Summary

This paper looks at the nomination and selection of Junichiro Tanizaki, a Japanese candidate for the Nobel Prize in Literature. Tanizaki was nominated seven times during the period from 1958 to 1965. The author wonders who and for what reason nominated Tanizaki as a candidate for the Nobel Prize in Literature, and how he was evaluated by the Swedish Academy responsible for choosing the Nobel Laureates in Literature.

Yasunari Kawabata became the first Japanese Nobel Laureate in Literature in 1968.

Now, the 1968 historical papers of the Swedish Academy are open to the public and the screening process of Kawabata as the Nobel laureates has gradually become clear. We should note the selections of not only Kawabata but also other Japanese candidates in about ten years since 1958. Tanizaki passed away in 1965, but before that, he was positioned as a leading candidate in the selection. Kawabata became a leading candidate after Tanizaki's death. It seems because the writings of Tanizaki, Kawabata and Yukio Mishima were translated one after another into German, English, French, and Swedish since the middle of 1950s. The Swedish Academy accumulated information and gained a better understanding about Japanese literature thanks to those translated works and the advice from American scholars who translated their writings. How did the Swedish Academy view Tanizaki's writings when they started adopting a serious stance on nomination of Japanese writers?

Keywords: Junichiro Tanizaki, the Makioka Sisters, the Nobel Prize in Literature, the Swedish Academy, Anders Johan Österling

はじめに

1 谷崎潤一郎の推薦状況

(1) 全般的状況

(2) 1958年

(3) 1962年

(4) 1963年

2 谷崎潤一郎に対するスウェーデン・アカデミーの評価

(1) スウェーデン・アカデミー内の選考

(2) 1958年

- (3) 1960年
- (4) 1961年
- (5) 1962年
- (6) 1963年
- (7) 1964年
- (8) 1965年
- おわりに

はじめに

2019年1月2日、スウェーデン・アカデミーは1968年分のノーベル文学賞選考をめぐる史料を公開した。1968年は、川端康成が日本人として初めてノーベル文学賞を受賞した年である。これにより、川端の受賞に至るまでの史料が出そろい、史料に基づいた研究が本格的にできる状態になった。川端については日本人の間で関心が高く、公開された史料に基づいて1968年の川端の選考についてすぐに報道や分析もなされた¹⁾。

しかし、1968年分として公開された川端関連の史料は必ずしも多くなかった。川端受賞に至る詳細を理解するためには、これまでに公開された史料ともつきあわせ、改めて検討することが必要であろう。その際、川端以外の日本人候補者との関連も視野に入れ、スウェーデン・アカデミー内でいかなる議論があったのかを考えることも重要である。表1と表2は、1958年から1968年までの日本人候補者の推薦状況と選考状況である。これを見てもわかるように、川端が1968年に受賞するまでには、川端以外にも注目された日本人候補者がいたのである。川端の受賞を理解するためには、1958年以来の一連の流れの中で検討する必要がある。

筆者は、1958年以降、ノーベル文学賞の候補者になっていた日本人として、川端とともに谷

表1 ノーベル文学賞日本人候補者の推薦状況 (1958～1968年)

選考年	日本人候補者 註1			
1958	谷崎潤一郎	西脇順三郎	—	—
1959	—	—	—	—
1960	谷崎潤一郎	西脇順三郎	—	—
1961	谷崎潤一郎	西脇順三郎	川端康成	—
1962	谷崎潤一郎	西脇順三郎	川端康成	—
1963	谷崎潤一郎	西脇順三郎	川端康成	三島由紀夫
1964	谷崎潤一郎	西脇順三郎	川端康成	三島由紀夫
1965	谷崎潤一郎	西脇順三郎	川端康成	三島由紀夫
1966		西脇順三郎	川端康成	—
1967		西脇順三郎	川端康成	三島由紀夫
1968		西脇順三郎	川端康成	三島由紀夫

註1 「—」は推薦なし。空欄は死去に伴い、ノーベル賞受賞資格がないことを示す。

出所 ノーベル財団ノミネーション・データベース <<https://nobelprize.org/nomination/literature/>>およびスウェーデン・アカデミー史料に基づき、筆者作成。

崎潤一郎、西脇順三郎、三島由紀夫の計4名に注目し、選考過程を検討してきた。その手始めとして、4名の作品の外国語への翻訳状況を調査した²⁾。川端、谷崎、三島については、1950年代中葉以降、ドイツ語、英語、フランス語をはじめ、スウェーデン語の翻訳も徐々に出版されていた。翻訳があつて初めて日本人の作家は、欧米で注目され、ノーベル文学賞の有力候補者にも

表2 ノーベル文学賞日本人候補者の選考状況（1958～1968年）

選考年	日本人候補者	候補者総数	ノーベル委員会ショートリスト候補者の選出状況 註1	受賞者（出身国）
1958	谷崎潤一郎	41	無	Boris Pasternak（ソ連）辞退
	西脇順三郎		無	
1959	無	55	無	Salvatore Quasimodo（イタリア）
1960	谷崎潤一郎	58	6名に残るが、委員長案最終候補者3名には入らず	Saint-John Perse（フランス）
	西脇順三郎		無	
1961	谷崎潤一郎	56	無	Ivo Andrić（ユーゴスラヴィア）
	西脇順三郎		無	
	川端康成		無	
1962	谷崎潤一郎	66	無	John Steinbeck（アメリカ）
	西脇順三郎		無	
	川端康成		無	
1963	谷崎潤一郎	80	無	Giorgos Seferis（ギリシャ）
	西脇順三郎		無	
	川端康成		無	
	三島由紀夫		6名に残るが、委員長案最終候補者3名には入らず	
1964	谷崎潤一郎	76	6名に残るが、委員長案最終候補者2名には入らず	Jean-Paul Sartre（フランス） 辞退
	西脇順三郎		無	
	川端康成		無	
	三島由紀夫		無	
1965	谷崎潤一郎	90	無	Michail Solochov（ソ連）
	西脇順三郎		無	
	川端康成		無	
	三島由紀夫		無	
1966	西脇順三郎	72	無	S. J. Agnon（イスラエル）、 Nelly Sachs（スウェーデン）
	川端康成		6名に残り、委員長案最終候補者5名の第1位となる	
1967	西脇順三郎	70	無	Miguel Angel Asturias（グアテマラ）
	川端康成		7名に残り、委員長案最終候補者3名の第2位となる	
	三島由紀夫		7名に残るが、委員長案最終候補者3名には入らず	
1968	西脇順三郎	83	無	川端康成（日本）
	川端康成		4名に残り、委員長案最終候補者3名の第3位となる	
	三島由紀夫		無	

註1 ショートリストとは、スウェーデン・アカデミーのノーベル委員会が関心をもち、絞り込んだ候補者リストとする。ノーベル委員会は委員長報告の形で最終的にそのうち数名に順位をつけてアカデミーに提案する。委員間で順位づけが割れた際は、委員長案のほかにも他の委員案も併記される。

出所 ノーベル財団ノミネーション・データベース<<https://nobelprize.org/nomination/literature/>>およびスウェーデン・アカデミー史料に基づき、筆者作成。

なったのである。

本稿では、日本人候補者の選考状況を取り上げる。具体的に誰が日本人候補者を推薦していたのか、またスウェーデン・アカデミーはいかなる評価をしたのかを明らかにしたい。4名すべてを一度に取り上げることは、紙幅の都合で困難であるため、まずは谷崎潤一郎を取り上げる。前掲の拙稿において、筆者は、1965年を境にそれ以前は谷崎潤一郎が有力候補者とされ、それ以後は川端康成が有力候補者になっていたことを指摘した³⁾。1965年は谷崎が亡くなった年である。谷崎は同年7月30日、湯河原にて死去している（享年79歳）。そのため、まず谷崎を取り上げる意味は大きいと考えられる。最初に谷崎の推薦状況を明らかにする。誰がいかなる理由によりノーベル文学賞に谷崎を推薦していたのであろうか。ついで、ノーベル文学賞を選考するスウェーデン・アカデミーにおける谷崎の評価について考察する。谷崎の文学は、スウェーデン側にいかに映っていたのであろうか。スウェーデン・アカデミーが日本人作家を本格的に取り上げ始めたときの状況がわかるであろう。

1 谷崎潤一郎の推薦状況

(1) 全般的状況

表1、表2に見られるように、谷崎は1958年に推薦され始め、その後1960年、1961年、1962年、1963年、1964年、1965年と、亡くなる年まで計7回、ノーベル文学賞に推薦されていた。

谷崎の推薦者は表3の通りである。現時点でスウェーデン・アカデミーの公開している史料に

表3 ノーベル文学賞日本人候補者、谷崎潤一郎の推薦者一覧（1958～1965年）

選考年	日本人候補者	推薦者	職業・肩書	推薦状日付・差出地
1958	谷崎潤一郎	ライシャワー (Edwin O. Reischauer)	ハーバード大学教授	1957年11月18日付・Cambridge, Massachusetts
		ヒベット (Howard S. Hibbett)	カリフォルニア大学講師	1957年12月11日付・Los Angeles, California
		キーン (Donald Keene)	コロンビア大学教授	1957年12月27日付・New York
		バック (Pearl S. Buck)	作家	1958年1月17日付・Perkasie, Pennsylvania
		三島由紀夫	作家	1958年1月24日・東京
1959	無	無	無	無
1960	谷崎潤一郎	Per Sigfrid Siwertz	作家、スウェーデン・アカデミー会員	無（口頭の提案と考えられる）
1961	谷崎潤一郎	日本作家協会 (The Japanese Authors' Union)		不明（スウェーデン・アカデミー史料になし）
1962	谷崎潤一郎	ヒベット (Howard S. Hibbett)	ハーバード大学准教授	1961年7月24日付・Cambridge, Massachusetts
1963	谷崎潤一郎	キーン (Donald Keene)	コロンビア大学教授	1963年1月25日付・New York
1964	谷崎潤一郎	マッティンソン (Harry Martinson)	詩人、スウェーデン・アカデミー会員	無（口頭の提案と考えられる）
1965	谷崎潤一郎	マッティンソン (Harry Martinson)	詩人、スウェーデン・アカデミー会員	無（口頭の提案と考えられる）

出所 ノーベル財団ノミネーション・データベース <<https://nobelprize.org/nomination/literature/>>およびスウェーデン・アカデミー史料に基づき、筆者作成。

よれば、1958年、1962年、1963年については、主としてアメリカから推薦状が出されており、その原本もある。

それに対して、1960年はスウェーデン・アカデミー会員のシヴェルツ（Per Sigfrid Siwertz）⁴⁾が推薦し、1964年、1965年は同じくスウェーデン・アカデミー会員のマッティンソン（Harry Martinson）⁵⁾が推薦していた。スウェーデン・アカデミー会員が推薦する場合、通常、例会において口頭で推薦を伝えるため、推薦状などの史料は残っていないことが多い。谷崎についても推薦状はない。少なくとも、候補者の氏名はノーベル財団ノミネーション・データベース⁶⁾とスウェーデン・アカデミーが公開した候補者リストにより明らかになっている。

そのほか、1961年は「日本作家協会」（The Japanese Authors' Union）が谷崎を推薦したとノーベル財団ノミネーション・データベースが明記している（同様に、同年「日本作家協会」は西脇順三郎も推薦したとされている）。しかし、その推薦状は現時点ではスウェーデン・アカデミー史料で確認されておらず、詳細は不明である。1961年の推薦では、別稿で論じたように、スウェーデン・アカデミーに対する松井明在スウェーデン日本大使の働きかけがあった。1961年1月末か2月初めに松井大使はスウェーデン・アカデミー・ノーベル委員会書記のヴィレシュ（Uno Willers）に接触し、同年の日本人候補者としてすでに推薦されていた川端以外に谷崎と西脇を追加するように求め、推薦状を手配することを約束した。この依頼をヴィレシュは受け入れている。日本外務省史料では、同年2月の段階で中央公論社社長名の推薦電報が発出されたと記録され、西脇については辻直四郎東京大学教授が推薦状を送付したとされている⁷⁾。中央公論社は『細雪』などの個々の作品、さらに全集を出版するなど、谷崎と縁の深い出版社である。しかし、出版社社長にはノーベル文学賞の推薦資格はない。最終的に、「日本作家協会」推薦の形となった経緯は不明である。松井の依頼した谷崎と西脇がともに「日本作家協会」の推薦とされているところを見ると、ヴィレシュの判断で松井の追加依頼を便宜的に候補者リスト上で「日本作家協会」推薦として処理したのかもしれない。なお、スウェーデン側の史料がないため、この「日本作家協会」が日本のどの団体をさすのかも不明である（該当する団体として日本文芸家協会、日本ペンクラブなどが考えられる）。

以上の理由から、本章では推薦状の原本のある1958年、1962年、1963年の推薦状況を紹介するが、紙幅の都合により推薦状の要点を整理する。

（2）1958年

谷崎は、1958年のノーベル文学賞候補者として、アメリカ人のライシャワー（Edwin O. Reischauer）ハーバード大学教授、ヒベット（Howard S. Hibbett）カリフォルニア大学講師、キーン（Donald Keene）コロンビア大学教授、作家のバック（Pearl S. Buck）から推薦されていた。さらに日本人作家、三島由紀夫からも推薦されていた。以下ではこの5名の推薦状を簡単に見てみよう。

(a) ライシャワー

ライシャワー教授は1957年11月18日付けでスウェーデン・アカデミーのエステルリング (Anders Johan Österling)⁸⁾ 委員長宛てに2頁にわたる推薦状を出している⁹⁾。

推薦状冒頭において、ライシャワーは、こうした推薦を以前にはしたことがないが、谷崎潤一郎の名前に注目してもらわなければならないと強く感じたとまず指摘する。その上で、ライシャワーは、ノーベル委員会がノーベル文学賞候補者として谷崎をすでに検討してきたと理解するが、今回改めて検討する良い理由があると述べている。

続けて、ライシャワーは、日本文学の国際的評価に言及する。すなわち、非ヨーロッパ文学が西洋文学よりも注目されていない傾向を指摘する。その理由としては、西洋のほとんどの研究者、批評家がこれらの文学を読めず評価しておらず、翻訳が通常まれであり、日本の作品の場合、ほとんどいつも不十分であることを挙げている。言語の壁は、恐らく日本に極めて不公平であるとする。過去50年間の日本の文学活動が極めて多様で、活気があり、その過去半世紀の文学作品は西洋で生み出された最善のものに比肩するとしている。

その後、ライシャワーは、日本的趣味の作品は最高のものでも西洋の文学規範に慣れた者にはアピールしないことも時折あるとする。しかし、偉大な文学者が出現することもあるとして、その例として夏目漱石と谷崎潤一郎を挙げている。谷崎を今回推薦した理由としては、彼の偉大な作品『細雪』がサイデンステッカー (Edward G. Seidensticker) の訳で『蒔岡姉妹』として最近出版されたことを挙げている。同作品を現代の偉大な作品の一つと指摘し、翻訳も可能限り完全になされているとする。

すでに『蓼喰ふ虫』が翻訳されているが、ライシャワーの好みでは、これは『蒔岡姉妹』には劣るとする。『蒔岡姉妹』が日本人の生活やメンタリティーを最も良く明らかにしていることなど、ライシャワーは内容についても掘り下げた紹介を行なっている。

最後に、ノーベル委員会が1958年ノーベル賞に谷崎を真剣に検討してほしいと結んでいる。

以上のように、ライシャワーはこれまで日本文学が世界で注目されていない状況を指摘した上で、日本にも優れた文学者がおり、谷崎を挙げている。さらにその代表作として『細雪』の内容にも触れ、谷崎をノーベル賞に推薦したのである。

(b) ヒベット

ライシャワーの推薦状に続いて、カリフォルニア大学ロサンゼルス校のヒベット講師が1957年12月11日付けで推薦状をスウェーデン・アカデミーのエステルリング委員長宛てに発出している¹⁰⁾。この推薦状は、1頁の簡潔なものである。

まず最初にヒベットは、ノーベル賞委員会が次の賞に日本人小説家、谷崎潤一郎を検討するよう希望している。続けて、谷崎が日本の主要小説家として一般に受け入れられているだけでなく、自分の知る限りアジアの第一級小説家でもあると指摘し、その意見は、最近英語や西洋の他の数

言語で出た作品の翻訳で立証されるとも述べている。

このように、ヒベットの推薦状は短いものであるが、谷崎が日本のみならずアジアにおいて一流の小説家であること、最近英語などへの翻訳が出たことを強調していた。

(c) キーン

コロンビア大学教授のキーンは1957年12月27日付けでスウェーデン・アカデミーのエステルリング委員長宛てに推薦状（1頁）を出している¹¹⁾。

この推薦状の冒頭で、キーンは、「出版社アルフレッド・A・クノップ社の提案で」谷崎潤一郎へのノーベル文学賞授与の可能性について手紙を書いていると記している。これに示されるように、『細雪』の英語版を出したクノップ社が谷崎の推薦を企画し、関係者に推薦状を依頼した結果と考えられる。内容は、それぞれ異なり、各執筆者の自由に任されていた。しかし、キーンの推薦状もこれまでのライシャワー、ヒベットの推薦状も、全く同じ送り先、住所であることは単なる偶然ではなく、これが理由であろう。1958年の谷崎については、一種の推薦キャンペーンが行なわれたと考えられる。

キーンは、71歳の谷崎が衰えも見せずに多様なテーマに関して作品を出してきたことをまず指摘し、『蓼喰ふ虫』、『細雪』が英語をはじめ主なヨーロッパ言語に訳されてきたことを紹介している。その結果、谷崎が国際的な名声をすでに獲得しており、ノーベル委員会委員が日本語に慣れていなくても代表的な作品を読むことができると述べている。その後、谷崎が日本の伝統と現代世界にほぼ等しく属していると述べ、その小説において、今日の日本人の生活がもつこれら2つの最重要面の衝突を頻繁に描いていると述べている。

最後に、キーンは、ノーベル委員会が近い将来の賞に谷崎を検討することを希望して、この推薦状を終えている。

(d) パール・バック

アメリカの著名小説家で1938年にノーベル文学賞を受賞したパール・バックは、1958年1月17日付けでノーベル委員会宛てに2頁の推薦状を書いている¹²⁾。内容はキーンの推薦状をほぼそのまま引用し、さらにイギリスの『タイムズ・リテラリー・サプリメント』紙の谷崎評、『マンチェスター・ガーディアン』紙、『ザ・サンデー・タイムズ』紙、『エンカウンター』誌における谷崎の『蓼喰ふ虫』の書評を引用したものであった。キーンの推薦状がほぼそのまま引用されていることから、キーン本人あるいはクノップ社がバックに推薦状の写しを提供したものと考えられる。

内容は、まず上記のキーンの推薦状がそのまま使われ、『蓼喰ふ虫』、『細雪』の翻訳が英語やその他の言語で出版されていることを指摘し、その結果、言語の壁にもかかわらず、谷崎が国際的な名声をすでに獲得していることは明白であり、ノーベル委員会委員が日本語に慣れていなく

でも代表的な作品を読むことができると述べている。

その後も、キーンの谷崎文学の紹介がほぼそのまま引用されている。谷崎が日本の伝統と現代世界にほぼ等しく属していると述べ、その小説において、今日の日本人の生活がもつこれら2つの最重要面の衝突を頻繁に描いていることなどが繰り返されている。

キーンの紹介の後には、『タイムズ・リテラリー・サプリメント』紙の谷崎評が引用されている。それによれば、心理的機微への情熱がプルースト、ジッド、ヴァージニア・ウルフの影響下で複雑な人間関係の小説へ広がったと述べている。さらに同記事は、今日の日本の最も卓越した小説家として川端と谷崎を挙げている。これに続けて、バックは『マンチェスター・ガーディアン』紙、『ザ・サンデー・タイムズ』紙、『エンカウンター』誌に載った『夢喰ふ虫』の書評を引用し、どれも同書を高く評価していることを示している。最後に、これらがバラバラな引用ではあるが、イギリスのプレスの全般的な傾向を誤っては伝えていないと述べて、推薦状を終えている。

以上のように、バックの推薦状は独自性に欠けるが、キーンの推薦状の要点を繰り返すとともに新聞、雑誌における様々な谷崎評を紹介するものであった。『タイムズ・リテラリー・サプリメント』紙の指摘する外国作家からの影響という点は、興味深い。

(e) 三島由紀夫

1958年の推薦状の最後は、三島由紀夫のものである。三島は、1958年1月24日付けでノーベル賞委員会宛てに1頁の推薦状を出している¹³⁾。三島がこれを執筆した経緯は不明である。

推薦状において、三島は谷崎の名前がノーベル文学賞候補者として頻繁に言及されていると述べ、自分も谷崎が候補者になることを支持して簡潔に書きたいとしている。三島は、谷崎を極めて才能ある作家であり、現代日本文学を代表すると捉えてもよく、古典的な日本文学と現代西洋文学を最高水準で融合することに成功していると述べている。そのほか、三島は、学生時代に谷崎の小説の熱心な読者であったことに触れ、自分自身の著述が彼から深く影響を受けていると明らかにしている。

さらに三島は、戦争中に谷崎がファシズムを称賛するような発言を一度もしておらず、彼の著作が結果として禁止されたり、私家版に限定されたことにも触れている。その上で谷崎は極めて多くの作家たちよりも自分自身に忠実であったとしている。

最後に三島は、今日の日本の作家の中でノーベル賞の資格を最も有する作家として彼の名前を挙げるべきであると結んでいる。

以上のように、三島は短いながらも、自身の体験にも基づき、谷崎を高く評価する推薦状を書いている。第二次世界大戦中、『細雪』の出版が時局に合わないとの理由で、差し止められた事実にも触れるなど、アメリカ人の推薦状にはない点にもしっかりと触れており、興味深い。

本節では、1958年の推薦にかかわる5通の推薦状を簡単に整理したが、アメリカの出版社、クノップ社の提案で始まったと考えられる谷崎のノーベル文学賞推薦は、アメリカ人、日本人を

巻き込んで精力的に展開された。どの推薦状も谷崎について貴重な情報を提供しており、ノーベル賞の推薦キャンペーンによく見られる同一内容の推薦状が多数送付される事態になっていない点は評価できる。

(3) 1962年

1962年の選考に際して、ハーバード大学准教授になっていたヒベットが谷崎の推薦状をノーベル委員会宛てに出している。1961年7月24日付けの1頁の推薦状である¹⁴⁾。

まずヒベットは、1954年にノーベル賞に値する作家として谷崎を支持する書簡をノーベル委員会に提出していたことに触れ、7年後の今日、現代日本文学の充実と彼自身の顕著な貢献がそうした表彰に値するとより一層強く感じていると述べている。その上で、谷崎の作品が、長い日本文学の伝統の力を利用するものであり、その影響を狭めたり、弱めたりはしていないことを評価している。称賛する多くの小説家がいるものの、そうした幅と力をもつ小説家はほかにはいないとさえ述べている。

最後に、谷崎への授賞が日本文学だけでなく、特に世界中の読者にも最大の価値を有するものであると信じると指摘し、ヒベットは推薦状を結んでいる。

ヒベットが指摘した1954年の推薦は、スウェーデン・アカデミーでは記録されていない。当時のヒベットの肩書から推薦有資格者と見なされなかった可能性がある。

(4) 1963年

1963年には、コロンビア大学のキーン教授が同年1月25日付けでスウェーデン・アカデミー・ノーベル委員会宛てに推薦状(2頁)を提出している¹⁵⁾。

この推薦状で、キーンは谷崎を1963年ノーベル文学賞に推薦したいと述べた上で、谷崎が過去半世紀以上の間、日本で特別な名声を確立したことを指摘する。それに続いて、50年以上にわたる作品を時系列的に紹介している。取り上げられているのは、1924年の『痴人の愛』、1928年の『蓼喰ふ虫』、戦前・戦後の『源氏物語』、1943～1948年の『細雪』、1962年の『瘋癲老人日記』である。

それらを紹介した後、キーンは、谷崎が素晴らしく創意工夫に富む作家であり、明確で感覚の鋭い散文の名人であると述べている。さらに、日本文学の大御所として認識され、日本語の純粋さを具現する最も著名な人物であると指摘し、絶賛している。また、彼の作品が、社会のあらゆる階級に属するあらゆる年齢の読者の間で人気を博していることにも触れている。

最後に谷崎の著作のほんの一部分しかヨーロッパ言語に翻訳されていないが、彼の全作品の豊かさや卓越さを連想させるには十分利用できると述べて、推薦状を終えている。

谷崎の主要著作を振り返り、その位置づけを明確にするこの推薦状は、日本文学に広く通じ、谷崎とも面識のあるキーンらしいものであろう。

2 谷崎潤一郎に対するスウェーデン・アカデミーの評価

(1) スウェーデン・アカデミー内の選考

スウェーデン・アカデミーでは、毎年1月31日付けで締め切った推薦状について、まず推薦を行なった者の資格、さらに候補者が精査され、その年の候補者リストが作成される。通常の推薦方法に加えて、スウェーデン・アカデミー会員から候補者が直接提案されることもある。その場合、正式な文書の推薦状の形はとらず、口頭で行なわれることが多い。

この確定した候補者リストに基づいて、スウェーデン・アカデミー内に設置させているノーベル委員会（アカデミー会員5名程度で構成）は候補者の絞り込みを開始するのである。毎年5月頃にはノーベル委員会は、5名程度の候補者をスウェーデン・アカデミーに提案する。彼らは、ショートリストの候補者といわれるが、その年の有力候補者ということができる。

アカデミー会員は、夏休みを通して、それら候補者の作品を読み、分析、評価することになる。ノーベル委員会委員も並行して候補者の絞り込みを続け、夏休み明けの9月中旬頃にはノーベル委員会としての報告書を作成し、スウェーデン・アカデミーに提出することになる。同報告書は、全候補者のリスト（若干のコメント付き）と最終候補者についての委員長報告から構成される。そこでは3名程度の最終候補者について順位づけもなされる。しかし、ノーベル委員会の審議において委員間で候補者に関して意見が割れた場合には、委員長報告に追加する形で、他の委員による候補者と順位づけの意見書も併記される。

このノーベル委員会報告書は、ノーベル文学賞選考の最終決定ではない。最終的に決定を行なうのは、スウェーデン・アカデミーの全会員からなる会議である。ノーベル委員会報告書は、その審議のためのたたき台にすぎない。報告書通りに授賞者が決まる場合もあれば、全く無視される場合もある。それはそのときの会員の議論次第である。そのため、報告書における候補者の順位づけ（特に委員長案の順位づけ）は、最有力候補者であることを示しているものの、絶対視することはできない。

そのほか、ノーベル委員会は、専門家にショートリストの有力候補者について報告書の執筆を依頼することもある。欧米で著名な候補者以外については、情報が限られている場合も多い。そのため、様々な国、地域、文学、言語学の専門家に専門的な知見に基づいた報告書を作成させ、候補者の評価、絞り込みに利用するのである。

スウェーデン・アカデミーは、第1章で紹介した推薦状のほか、ノーベル委員会報告書、さらに専門家報告書も50年ルールの下で公開している。以下では、紙幅の都合で主としてスウェーデン・アカデミーが公開したノーベル委員会報告書に基づいて分析を進めるが、専門家報告書についても若干言及する。ノーベル文学賞候補者としての谷崎は、スウェーデン・アカデミーでいかに評価されていたのであろうか。推薦された年ごとにその状況を整理する。

（２）1958年

1958年、谷崎は初めてノーベル文学賞候補者に推薦された。この年には41名の候補者が推薦されていた。谷崎は、日本人のみならずアメリカ人からも推薦され、推薦自体は注目を惹くものであった。しかし、結論から言えば、谷崎は選考において特に有力候補者となることもなく、早々に脱落している。初めてノーベル賞候補者に推薦され、スウェーデン・アカデミー会員にほとんど予備知識もないことを考慮すれば、これは自然なことであろう。

同年9月25日決定のノーベル委員会報告書を見る限り、ノーベル委員会の委員たちは6名の有力候補者を挙げていたが、その中でもソ連のパステルナークを強く推薦していた（表4参照）。委員間で意見の不一致は見られない。パステルナークは、スターリン時代のソ連で迫害を受けるなど、不遇な扱いを受けてきた作家である。ロシア革命時代を舞台にした彼の小説、『ドクトル・ジバゴ』はソ連では出版禁止となっていた。しかし、1957年にイタリアでまず出版されると、その後世界中で出版され、彼は一躍世界的な人気作家になった。結局、1958年のノーベル文学賞は、ノーベル委員会の報告書に沿う形でパステルナークに授与されることになった。なお、ソ連政府はこの授賞を歓迎せず、パステルナークに賞を辞退させている¹⁶⁾。東西間の対立が依然として続く冷戦時代を象徴する事件となった。

では、谷崎はノーベル委員会でいかに見られていたのであろうか。1958年のノーベル委員会報告書は、以下のように谷崎について簡単に紹介している。

「被推薦者〔谷崎——筆者、以下同様〕は、現代において日本の主要作家と見なされており、彼の名前は今やヨーロッパ諸言語への翻訳を通じて知られ始めている。彼の最も注目すべき作品は、幅広く構想された家族小説である『細雪』であろう。同書において、あらゆる国内の伝統が国際的な厳しい環境の中で消えつつあるという戦争前後の危機が続く母国において、慣習と社会の様子を観察する輝かしい存在として彼は登場する。谷崎は、熟練の自然主義者として活動するが、心理的な価値とローカルな色づけの良いセンスを有している。スウェーデン語にも翻訳された彼の『蓼喰ふ虫』は、より短い小説であるが、同書での芸術的な捉え方は同様に見事であり、そこでは日本の現実がもろい悲しみのベールの中で表現されている。本委員会は、〔谷崎の〕推薦に関心を表するが、現時点でそれを〔スウェーデン・アカデミーに〕推薦するつもりはない¹⁷⁾。」

以上のように、ノーベル委員会は欧米で翻訳が出た『蓼喰ふ虫』、『細雪』¹⁸⁾を通じて谷崎を日本の主要作家と認識し始めたことがわかる。日本の消えゆく伝統を繊細に捉えていることを評価する。そのため、ノーベル委員会は谷崎に関心をもちたことを明らかにするが、有力候補者としてスウェーデン・アカデミーに推薦するまでには及ばないと考えていた。国際的には谷崎はようやく知られ始めたときであり、ソ連のパステルナークに注目が集まる状況下では、まだ大々的に取り上げるべき存在ではなかったといえよう。

しかし、1958年は谷崎がスウェーデン・アカデミーに初めて推薦された年であった。初登場

表4 ノーベル文学賞候補者をめぐるノーベル委員会委員の選考状況（1958～1965年）

選挙年	候補者 総数	ノーベル委員会シヨ トリウス候補者 註1	Anders Osterling委員長 (委員任期1921～ 1981年、委員長は 1947～1970年)	Per Sigfrid Swertz (委員 任期1942～1963年)	Hjalmar Gullberg (委員 任期1947～1961年)	Eyvind Johnson (委員 任期1959～1972年)	Karl Henry Olsson (委員 任期1960～1971年)	Karl Gierow (委員任期 1963～1982年、委員 長は1970～1980年)	Johan Lindgren (委員 任期1964～1968年)	ノーベル委員会の決定	受賞者 (出身国)
1958	41	Boris Pasternak Alberto Moravia Salvatore Quasimodo Giuseppe Ungaretti Karen Blixen	1 Boris Pasternak 2 Alberto Moravia 3 Karen Blixen	本年の主要候補者として Boris Pasternakを強調して、 委員長案に同意	本年の主要候補者として Boris Pasternakを強調して、 委員長案に同意					1958年9月25日、ノー ベル委員会は満場一致 で報告書を決定	Boris Pasternak (ソ連) 辞退
1959	55	Karen Blixen Alberto Moravia Saint-John Perse	Karen Blixen	委員長案を支持	委員長案を支持	独自の意見書を提出 (現 時点では未確認)				1959年9月14日、ノー ベル委員会は満場一致 で報告書を決定。委員 会の過半数はKaren Blixenを推薦	Salvatore Quasimodo (イタリア)
1960	58	Ivo Andrić Saint-John Perse Henrich Boll André Malraux E. M. Forster	1 Ivo Andrić 2 Saint-John Perse 3 E. M. Forster			1 Saint-John Perse 2 Ivo Andrić 3 E. M. Forster 4 André Malraux	1 Saint-John Perse 2 Ivo Andrić 3 E. M. Forster			1960年9月23日、ノー ベル委員会は報告書を 決定	Saint-John Perse (フランス)
1961	56	Ivo Andrić E. M. Forster Henrich Boll Karen Blixen Graham Greene Jean Anouilh Simone de Beauvoir	1 Ivo Andrić 2 Graham Greene 3 Karen Blixen	第1位としてIvo Andrić を置くことで委員長案 に同意	第1位としてIvo Andrić を置くことで委員長案 に同意	第1位としてIvo Andrić を置くことで委員長案 に同意	第1位としてIvo Andrić を置くことで委員長案 に同意			1961年9月18日、ノー ベル委員会は報告書を 決定。委員会はアカデ ミーに満場一致でIvo Andrićを提案	Ivo Andrić (ユーゴスラヴィア)
1962	66	Karen Blixen Jean Anouilh Laurence Durrell Robert Graves John Steinbeck	1 John Steinbeck 2 Robert Graves 3 Jean Anouilh			第1位としてJean Anouilhを強調して委員 長案に同意	1 John Steinbeck 2 Jean Anouilh 3 Robert Graves			1962年9月13日、ノー ベル委員会は報告書を 決定	John Steinbeck (アメリカ)
1963	80	Samuel Beckett Pablo Neruda 三島由紀夫 Akseel Sandemose W. H. Auden Giorgos Seferis	1 Giorgos Seferis 2 W. H. Auden 3 Pablo Neruda	委員長案を支持	委員長案を支持	委員長案を支持	委員長案を支持	委員長案を支持。ただ し、ベケットの作家活 動をより前向きに評価 する留保をつけた		1963年9月19日、ノー ベル委員会は報告書を 決定。委員会はアカデ ミーに満場一致で Giorgos Seferisを提案	Giorgos Seferis (ギリシア)
1964	76	Samuel Beckett Eugenio Ionesco Jean-Paul Sartre 谷崎潤一郎 W. H. Auden Michail Solochov	1 Jean-Paul Sartre 2 Michail Solochov			1 Michail Solochov 2 W. H. Auden		1 Michail Solochov 2 Jean-Paul Sartre	病気のため出席せず、 Jean-Paul Sartreの名前 だけを記した意見書を 提出	1964年9月17日、ノー ベル委員会は第1位 Jean-Paul Sartre、第2 位Michail Solochovを 決定。Gierowと Johnsonは留保をつけ た	Jean-Paul Sartre (フランス) 辞退
1965	90	Anna Achmatova Michail Solochov Miguel Angel Asturias Jorge Luis Borges Samuel Joseph Agnon Nelly Sachs W. H. Auden	1 Michail Solochov 2 Samuel Joseph Agnon 3 W. H. Auden			1 Michail Solochov 2 Miguel Angel Asturias	1 Michail Solochov 2 Miguel Angel Asturias 3 Nelly Sachs	1 Michail Solochov 2 Samuel Joseph Agnon		1965年9月9日、ノー ベル委員会は満場一致 でMichail Solochovを 第1位に決定	Michail Solochov (ソ連)

註1 ショートリストとは、スウェーデン・アカデミーのノーベル委員会が関心をもち、絞り込んだ候補者リストとする。ノーベル委員会は委員長報告の形で最終的にそのうち数名に順位をつけてアカデミーに提案する。委員間で順位づけが割れた際は、委員長案のほかに他の委員案も併記される。

出所 ノーベル財団ノミネーション・データベース <<https://nobelprize.org/nomination/literature/>>およびスウェーデン・アカデミー史料に基づき、筆者作成。

にもかかわらず、一定の評価を得たと前向きに捉えることもできよう。これは、日本の新進作家の三島に加えて、日本文学、歴史の大家であるキーン、ヒベット、ライシャワー、さらに1938年のノーベル文学賞受賞者のバックという著名なアメリカ人によって、内容豊かな推薦状が提出された賜物ということができる。また、『細雪』の英語版が1957年にアメリカで出版され、話題になっていたタイミングも注目を浴びた理由であろう。

(3) 1960年

2度目に谷崎がノーベル文学賞に推薦されたのは、1960年であった。この年の推薦者は、スウェーデン・アカデミー会員兼ノーベル委員会委員のシヴェルツであった。1958年の推薦の際にも選考に当たった人物である。口頭での推薦と考えられ、文書による推薦状はスウェーデン・アカデミー史料で確認されていない。そのため、谷崎を推薦した理由は不明である。

そのシヴェルツは、1960年の最終報告書を決定した同年9月23日のノーベル委員会会合に欠席したが、同年8月26日付けの意見書を委員会に提出していた。それによれば、「アカデミーは今回通常の大きな文化サークルの外で探すべきであり、文学の良く踏みならされた道を離れた人物、イヴォ・アンドリッチに賞を与えるべきである」と述べている¹⁹⁾。アンドリッチは、ユーゴスラヴィアの作家であり、ヨーロッパでも周辺に位置する国の出身である。欧米の文学でも主流ではないことを強調しているように、シヴェルツはノーベル文学賞授賞者の地平を広げようことを意図していたと考えられる。

1960年には58名の候補者がいたが、結局、同年の受賞者はフランスの詩人、サン＝ジョン・ペルスになった。同年に残念な結果に終わったアンドリッチは、翌年にノーベル委員会の満場一致の推薦の下に最終的にノーベル文学賞を受賞している。シヴェルツの意見書に見られるように、1960年代にスウェーデン・アカデミーには授賞者を多様化しようとする変化が徐々に表れていたと考えられる。

1958年と同様に1960年も日本人では谷崎とともに西脇順三郎が推薦されていた。1958年との違いでは、谷崎だけがノーベル委員会のショートリストに選ばれたことである。58名のうち、6名が選ばれ、詳細な分析、評価の対象になったのである。谷崎以外の5名の名前（出身国）は、以下の通りである。アンドリッチ（ユーゴスラヴィア）、ペルス（フランス）、ベル（ドイツ）、マルロー（フランス）、フォースター（イギリス）。非欧米の出身者は谷崎だけであった（表4参照）。

しかし、谷崎はこの6名がさらに絞り込まれた段階では脱落している。1960年9月23日のノーベル委員会で、各委員は順位をつけた上で3名あるいは4名の候補者を選んだが、その中に谷崎の名前はなかった。第1位にアンドリッチを推す委員とペルスを推す委員に2分される形になった。こうした様々な順位づけを含めたノーベル委員会報告書がスウェーデン・アカデミーの全体会議に提出され、その審議の結果、上記の通り、ペルスが授賞者として選出されたのである。

1960年のノーベル委員会報告書には、谷崎についての言及がある。エステルリング委員長の意見書には、谷崎について以下のような指摘がある。

「日本人、谷崎潤一郎については、彼の作家活動がヨーロッパやアメリカの競争相手たちと比肩するのに必要とされる水準を満たしているとは私は確信できていない。彼の最も代表的な小説『細雪』は、登場人物の描写では功を奏しているが、ある種の重々しさとそっけなさで損をしており、現代日本の転換期の魅力的素材を活かし切れていない²⁰⁾。」

これに示されるように、エステルリング委員長は、詳細な分析の末に谷崎が欧米の作家たちには及ばないと考えていたのである。代表作の『細雪』に関しても、表現方法に難点を見出している。1958年のコメントでは、『細雪』に関して好意的な見方であったが、その評価が後退してきていることが分かる。その点では、58候補者から6名のショートリスト候補者の一人に選ばれたとはいえ、厳しい評価といえよう。

なお、同年の選考で日本人候補者、谷崎と西脇についての情報不足を補うために、ノーベル委員会は日本側に資料提供を求めている。1960年3月、スウェーデン王立図書館館長でノーベル委員会書記を務めるヴィレシュは在スウェーデン日本大使の松井明に対して「両者についての検討(Comparing Analysis)とその著書」の送付を求めたのである。同年4月以降、日本外務省本省は、両者の詳細な履歴書、作品リスト、著書を松井大使経由でスウェーデン・アカデミーに送付している²¹⁾。このときの履歴書、作品リストは、専門家報告書としてそのままスウェーデン・アカデミーでの選考に利用されることになった²²⁾。特に、谷崎がショートリストに選ばれたこともあり、谷崎の基礎情報として実際に意味をもったと考えられる。

(4) 1961年

1961年には、日本人候補者として谷崎、西脇とともに、川端康成が初めて推薦され、3名が選考の対象となった。全体では66名の候補者がいた。ノーベル委員会によって絞り込まれる過程で残ったのは、欧米の7名であり、日本人は誰も選ばれなかった。ノーベル委員会は、1961年9月18日にスウェーデン・アカデミーに提出する報告書を決定したが、第1位候補者として満場一致でアンドリッチを選出した(表4参照)。通常、委員の意見が割れることも多い状況から考えると、1961年はパステルナークが推薦された1958年と似ている。スウェーデン・アカデミーの最終的な選考結果は、ノーベル委員会報告書の通り、アンドリッチへの授賞であった。アンドリッチは前年も最有力候補者として最終段階まで残っており、彼への支持がアカデミー会員の間で広がっていたと考えられる。

1961年の選考で谷崎はいかなる評価を受けていたのであろうか。同年のノーベル委員会報告書には、ショートリストに選ばれた以外の候補者についてもコメントが記されている。谷崎については、西脇とまとめて簡単なコメントがつけられている。

「55) 西脇順三郎と56) 谷崎潤一郎。これら日本人の推薦に関する問題では、部分的には情

報が不十分であるため、本委員会は依然として静観しなければならなかった。両推薦者について判断ができるとしても、どちらも検討に値するとは明らかにいえないだろう²³⁾」(なお、人名につけられた番号は、候補者リストの番号である)。

西脇にしても、谷崎にしても、翻訳された作品が少ないため、評価をすることはできず、先送りするしかないという見解であった。さらに、現状では西脇も谷崎も検討に値しないという判断は極めて厳しい評価であろう。谷崎については、1950年代中葉以降、『細雪』をはじめ翻訳が徐々に進んでいた。それにもかかわらず、外国語の著作の極めて少ない西脇と同様に見られていた。前年の『細雪』に対する辛口の評価がこうした見方につながったのであろう。

他方、同年に初めて候補者になった川端については、報告書は短いコメントではあるものの、『千羽鶴』について言及し、川端に関心を示している。その上で、評価するには翻訳されたものが少ないと述べ、推薦を将来に延期しなければならないと指摘している²⁴⁾。

(5) 1962年

1962年に世界中から推薦されたノーベル文学賞候補者は、66名であった。この時期、候補者の総数は徐々に増える傾向にあった。そのうち、日本人候補者は前年と同様に谷崎、西脇、川端の3名であった。

1962年9月13日に決定されたノーベル委員会報告書によれば、同年のショートリストに選ばれた候補者は5名である(表4参照)。5人とも欧米の出身者である。ノーベル委員会の会合では、委員の意見は割れ、第1位の候補者には、スタインベック(アメリカ)、グレーヴズ(イギリス)、アヌイ(フランス)の3名の名前が挙げられた。最終的にスウェーデン・アカデミーはスタインベックを授賞者に選出している。

1962年の日本人候補者は、前年と同じ谷崎、西脇、川端であった。この3名は、ノーベル委員会で上記の5名に選ばれることはなかった。ノーベル委員会報告書には日本人候補者について簡単なコメントが記されている。

「15.& 16. 谷崎潤一郎と川端康成。委員会の意見によれば、これら両日本人への推薦についてどちらも現時点では関心をもち、真剣に検討することはできない。より若い川端の詩的な色合いの叙述技法は確かに独特な芸術的ニュアンスをもち、民族的な特色が感じられるが、谷崎のかんりの自然主義は、たとえば一族の小説である『細雪』に見られるが、西洋の影響を大きく受けていると思われる²⁵⁾。」

ここでも、川端の日本文化に裏打ちされた詩的な叙述に対して好感が示されているのに対して、谷崎については自然主義の作家と見られ、西洋の影響が強いという評価になっている。1960年のノーベル委員会報告書においてエステルリング委員長は『細雪』の叙述の甘さを指摘していたが、1962年の評価では谷崎の自然主義が西洋の影響によるとの新たな見方が付け加わることになった。

なお、1962年の選考では谷崎、川端、西脇に関してハーバード大学准教授のヒベットが作成した専門家報告書がある（1962年3月7日付け）²⁶⁾。日本人候補者3名について情報が限られており、その優劣もつけがたい状況下で、ノーベル委員会書記のヴィレシュが2月14日付けの書簡でヒベットに「小さな比較したメモ」を求めたのであった。

ヒベットは3者について、その文学の特徴を整理しているが、西脇については谷崎、川端と一緒に扱われていること自体に驚きを示し、西脇以上の詩人が多数いると批判している。それに対して、谷崎と川端についてはともに高く評価する紹介をしている。この報告書では簡単に彼らの作品を特徴づけるだけにとどめている。川端が詩的な傾向の心理小説を書いてきたとして、日本の俳句、短歌の伝統の下にあるとする。それに対して、谷崎はもっと活力のある技法をもち、その特別な名人芸を力として多様な表現法、声で幅広い作品を書いてきたことを紹介している。『源氏物語』の現代語訳にも触れている。ヒベットは、結論として谷崎も川端も単に日本に属する小説家というよりも、世界に属する小説家であるように見えると述べている。

（6）1963年

1963年は80名の候補者が推薦された。1958年の候補者が41名であるため、倍増ともいえる増え方である。それだけノーベル文学賞への関心も高まったといえるであろう。

この年の選考自体は、ノーベル委員会のレベルでは比較的順当な流れで推移したと考えられる。ノーベル委員会は1963年9月19日に会合を開き、ノーベル委員会報告書を決定した。エステルリング委員長をはじめ、委員は委員長案を支持し、前年のように意見が割れることはなかった。委員長案の第1位は、ギリシャの詩人セフェリスであり、他の4名の委員もこれを支持し、委員会は満場一致でセフェリスをスウェーデン・アカデミーに提案したのである。

日本人の候補者は前年の谷崎、西脇、川端にさらに三島由紀夫も加わり、計4名になっている。この4名のうち、初登場の三島のみがショートリストに選ばれている。同年のショートリストには6名の候補者が選ばれていたが、その中にはチリの詩人、外交官のネルーダがいた。アジアからは、三島のみであった。しかし、前述の通りセフェリスがノーベル委員会の注目を集める中、三島は最終候補者に選ばれることはなかった。三島の評価に関しては、稿を改めて論ずるが、同年のノーベル委員会報告書におけるエステルリング委員長の三島評価は悪いものではなかった。将来性があるとの専門家の三島評価を考慮するとともに、三島の才能を高く買っている。日本人候補者4名の中では、ノーベル賞を取る可能性が最も高いとすら述べ、今後も三島の作品に注目する必要性を説いている²⁷⁾。このように、エステルリングは日本人の若手作家を将来の有力候補者として見ていたのである。

それに対して、本稿の対象である谷崎について同報告書はいかなる見方をしていたのであろうか。すなわち、「谷崎が確かに異議も出ない程の中心人物であるとの日本人の意見は知っているものの、本委員会は残念ながら異なる意見を有していることに気づいた。賞により新しくかつ重

要な言語地域に到達することがいかに差し迫ったものであるとしても、現時点ではその選択肢を推薦することはできない」²⁸⁾と記していた。ノーベル委員会は、谷崎が日本で重要な人物であることは認識しつつも、谷崎に否定的であった。これは、エステリング委員長の下でこれまでなされてきた谷崎評とも符合するものであり、驚くべきことではない。最後の点は、非欧米圏の日本人にノーベル文学賞を出すことで同賞をグローバル化することに迫られていたことを物語る。そうした願望はあったものの、その水準に達していない谷崎に賞を出すことはできないということであろう。

川端についても、4名の推薦の中で決定的に抜きこんでいるとの印象はないとしており、委員会として現時点で推薦する気はないとしている²⁹⁾。

1963年の選考では、コロンビア大学教授のキーンによる専門家報告書（1963年3月15日付け）が出されている³⁰⁾。これは、上記のエステリング委員長とは異なる内容であり、谷崎、川端、三島、西脇4名の優先順位について極めて貴重な意見を展開していた。

キーンは、報告書冒頭にノーベル賞が作家の全作品を基礎に授与されるとすれば、谷崎潤一郎がその名誉に最も値するというのが明確であろうとしている。その上で、谷崎が50年以上も作品を出し続け、最近も人気作『鍵』、『瘋癲老人日記』を出したことに触れている。さらに、日本人のノーベル文学賞に対する見方も紹介している。それによれば、日本の人々はノーベル文学賞の受賞に熱烈な関心をもっており、もし日本人がもらうならば、それは谷崎であると期待しているとする。谷崎が受賞したとの誤った噂の件についても触れた後、これは最も明白な選択肢が谷崎であることを示唆していると結論づけている。川端については、その最も良い小説は谷崎を越えているとするが、最近作は1作を除き失望するものであると述べている。しかし、川端が受賞しても日本人は歓迎するであろうとしている。三島については、現役の最良の作家としつつも、今成功しなくても、将来再び候補者になるだろうと述べている。高齢の谷崎、川端にとっては、三島あるいは他の日本人に賞が授与されると、次のチャンスがないとも指摘している。西脇については、キーンは他の3人と同じクラスではなく、彼の名前が含まれていることが驚きであるとも述べ、候補者として完全に否定していた。

このように、キーンは谷崎の受賞を強く期待する報告書を出していたのである。しかし、1963年のノーベル委員会の審議には影響した形跡は見られない。

（7）1964年

1964年の選考には、76名の候補者が世界から推薦された。1964年9月17日にノーベル委員会が決定した報告書を見ると、同年は前年とは異なり、委員の意見が大きく割れたことがわかる。後述のように、ショートリスト6名に谷崎も選ばれていたが、委員の関心はサルトル（フランス）とショーロホフ（ソ連）に向けられ、二人のどちらを第1位にするかであった。委員会に出された4名の委員の意見は、サルトル2名、ショーロホフ2名であった。たとえば、エステリング委

員長は第1位サルトル、第2位ショーロホフとしていた。この案は、ショーロホフを推す他の2名の委員の留保つきでノーベル委員会の決定とされ、スウェーデン・アカデミーへ提出された（表4参照）。結局、同年の受賞者には、サルトルが選ばれた。しかし、サルトルは受賞を辞退したため、スウェーデン・アカデミーとしては面子を潰す結果に終わった。

1964年の日本人候補者は、前年と同じく谷崎、西脇、川端、三島の4名であった。ノーベル委員会報告書のコメントによれば、川端については決定的に抜きんできているとの専門家の意見がなく、ノーベル委員会として推薦には至らなかったと記されている。三島についても、専門家の助言に従い、将来に任せることになった。西脇については、前年に否定されたとされている³¹⁾。その結果、4名の日本人候補者のうち、谷崎だけがショートリストに取り上げられることになった。谷崎について、エステルリング委員長は以下のように指摘している。

「専門家により日本人候補者の中で一番に推されている谷崎潤一郎についての問題であるが、私は残念ながら彼の技術的熟練さが真の偉大さに値するとは確信できない。谷崎の代表作であり、一族を扱った長編小説、『細雪』の英訳には、彼の良いニュアンスをもつ表現技法が発揮されていないと指摘されている。最近、翻訳された小説集（『5つの日本の物語』）³²⁾は、彼の表現技法家としての強い印象について恐らくより良い考えを提供するが、同時にサディスト的主題の嗜好が示されており、西洋の読者には不快に受け取られている³³⁾。」

エステルリング委員長は、専門家の意見（特に、前年のキーンの報告書）に後押しされる形で谷崎をショートリストに改めて取り上げたと考えられるが、『細雪』においても谷崎の表現技法が十分に発揮されておらず、不満をもったままである。さらに、今回は別の小説集にサディスト的な嗜好を見出し、否定的な見方を強めている。1964年にも再度ショートリストに取り上げられ、谷崎が有力候補者であったことは事実であるが、ノーベル委員会の評価は必ずしも高いものではなかったと考えられる。

1964年には、ハーバード大学のヒベット教授が川端、三島、西脇、谷崎についての専門家報告書を提出している³⁴⁾。これは、1964年4月15日付けの書簡に対する返答の形を取っている。内容は、4名の候補者に関する1962年報告書に新たに情報を追加するものであった。谷崎については、その表現法の名人芸のみならず、作品に強いユーモアの傾向もある点が強調されている。しかし、それを翻訳で伝えることが極めて困難であり、ほとんどが失われていると指摘している。

（8）1965年

1965年は、90名の候補者が推薦され、これまでにない激戦になったと見えるが、実際には選考は順当に進んだと考えられる。1965年9月9日にノーベル委員会が決定した同委員会報告書を見る限り、ノーベル委員会委員の見方は割れていない。同年には7名の候補者がショートリストに選ばれている（日本人は含まれていない）。その後の順位づけではノーベル委員会委員は、第2位、第3位については若干の違いが見られるものの、第1位の候補者については全員がソ連

のショーロホフで一致している。これは1958年、1961年、1963年と似た状況である。ノーベル委員会は、満場一致でショーロホフを第1位に決定し、この報告書がスウェーデン・アカデミーに提出された。それを受けて、スウェーデン・アカデミーは同年の授賞者をショーロホフに決定している。前年にはショーロホフは最終候補者まで残っていたが、惜しくも授賞に至らなかった。2年がかかりでスウェーデン・アカデミー会員の支持を獲得したのである。

同年の日本人候補者は、谷崎、西脇、川端、三島の4名であった。3年連続の顔ぶれである。ノーベル委員会報告書によれば、誰もショートリストには選ばれていない。谷崎については、「その日本人作家は最近亡くなった」とのみ記されており、選考の対象から事実上外されたのである³⁵⁾。谷崎は、1965年7月30日、湯河原の自宅で病死している。まさに同年の選考中のことであった。

谷崎以外の日本人候補者については、まず川端は最も現実的で、谷崎死後唯一の地位にある候補者との専門家の報告書があるものの、翻訳が少ないため、ノーベル委員会はさらに検討を続けるとしている³⁶⁾。三島についても、専門家の報告書により、将来を見ていくことになる³⁷⁾。西脇については、専門家の報告書から否定的な印象をもち、却下している³⁸⁾。ここで登場した専門家の報告書は、ノーベル委員会がスウェーデン人ローンストウロム（John Rohnström）に依頼した1965年の報告書である³⁹⁾。紙幅の都合で詳細に取り上げることはできないが、これは日本で精力的に日本人専門家に面接調査をした結果に基づく報告書である。ローンストウロムは、真剣に検討する候補者として川端と谷崎を挙げており、もし川端と谷崎の共同受賞になれば、日本人から見て極めて幸福な解決策になるとも指摘していた。

おわりに

以上、谷崎潤一郎に焦点を当て、1958年から1965年までのノーベル文学賞選考の過程を明らかにしてきた。この期間、谷崎のほか、西脇順三郎、川端康成、三島由紀夫も推薦され、この4名が日本人初の受賞をめざして競争していたのであった。

すでに指摘した通り、この期間、ショートリストに選出された日本人候補者は、1960年、1964年の谷崎、1963年の三島であった。しかし、この3年とも谷崎も三島も最終候補者としてノーベル委員会からスウェーデン・アカデミーに推薦されることはなかった。ノーベル委員会により有力候補者として注目されただけで終わったのである。

推薦に関しては、推薦状が残っている年だけを見ても、谷崎について、極めて好意的な推薦になっている。特に1958年は谷崎が初めてスウェーデン・アカデミーに推薦された年であるが、日本人、アメリカ人から推薦状が出されている。これは、谷崎の『細雪』などを出版したアメリカの出版社、クノップ社の提案によるものであったと考えられるが、日本文学の存在をスウェーデン・アカデミーに売り込むうえでは強い印象は残したと思われる。クノップ社の例に見られる

ように、日本文学の作品が1950年代中葉以降、本格的に欧米で翻訳されるようになり、日本文学が実際にノーベル文学賞の対象になりうるようになったのである。しかし、本稿の対象とした1960年代前半までの選考では、翻訳の少なさが何度も言及され、大きな制約になっていた。そうした中でも、ノーベル委員会が日本人作家を継続的に調査したことは意味があろう。

しかし、谷崎に対するノーベル委員会の評価を見ると、それは必ずしも高いものではなかった。谷崎への授賞は極めて厳しかったと考えられる。ノーベル委員会のエステルリング委員長の眼から見ると、谷崎は自然主義の文学に位置づけられ、それは西洋の影響によるものとされていた。また、代表作の『細雪』の表現法にも不満が表明されていた。さらには、谷崎の作品に見られるサディストの主題の嗜好には不快感が表明されていた。数少ない翻訳を通して評価をせざるをえなかったノーベル委員会の限界が垣間見られるのである。谷崎の作品がより多く翻訳され、その評価についても専門家の意見を交えて深い議論が展開されていれば、ノーベル委員会の谷崎評も異なるものになっていたかもしれない⁴⁰⁾。日本文学がスウェーデン・アカデミーで本格的に取り上げられるきっかけを作ったという意味で、谷崎は日本人作家としてパイオニアと位置づけることができよう。

(よしたけ のぶひこ・高崎経済大学地域政策学部教授)

註

- 1) たとえば、以下を参照。「川端『日本文学の代表者』三島『伸びにより再検討』68年ノーベル文学賞選考」(『朝日新聞』2019年1月3日朝刊)。「川端にノーベル賞 評価曲折」(『朝日新聞』2019年1月11日朝刊)。「ノーベル文学賞1968年」上・中・下(『読売新聞』2019年1月8日、15日、22日朝刊)。待田晋哉「川端康成 ノーベル賞受賞秘話——50年目のスウェーデン・アカデミー資料公開——」(『中央公論』2019年3月)。
- 2) 拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル文学賞と日本、1958～1967年の日本人候補に関する基礎的研究——」(1)、(2・完)(『地域政策研究』(高崎経済大学)第21巻第3号、2018年2月、第21巻第4号、2019年3月)。
- 3) 同上、(1)、15頁。
- 4) シヴェルツ(生没年1882～1970年)は、スウェーデンの作家である。1932年にスウェーデン・アカデミー会員に選出された。1942～1963年まで同アカデミーのノーベル委員会委員を務めた。Bo Svensén, *De Aderton: Svenska Akademiens ledamöter under 225 år* (Stockholm: Svenska Akademien, 2011), s.84.
- 5) マッティンソン(生没年1904～1978年)は、スウェーデンの作家、詩人である。1949年にスウェーデン・アカデミー会員に選出された。1974年にノーベル文学賞を受賞した。*Ibid.*, s.208.
- 6) ノーベル財団ノミネーション・データベース<<https://www.nobelprize.org/nomination/literature/>>。
- 7) 前掲拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル文学賞と日本、1958～1967年の日本人候補に関する基礎的研究——」、(2・完)、15～16頁。
- 8) エステルリング(生没年1884～1981年)は、スウェーデンの詩人、作家である。1919年にスウェーデン・アカデミー会員に選出された。1921～1981年まで同アカデミーのノーベル委員会委員を務めた(そのうち1947～1970年には同委員会委員長)。そのほか、1922～1936年にはペンクラブ会長を務めた。Bo Svensén, *op.cit.*, s.187.
- 9) Letter from Edwin O. Reischauer to Dr. Anders Österling, 18 November 1957, Swedish Academy.
- 10) Letter from Howard S. Hibbett to Dr. Anders Österling, 11 December 1957, Swedish Academy.
- 11) Letter from Donald Keene to Dr. Anders Österling, 27 December 1957, Swedish Academy.
- 12) Letter from Pearl S. Buck to the Nobel Committee, the Swedish Academy, 17 January 1958, Swedish Academy.
- 13) Letter from Yukio Mishima to the Nobel Prize Committee, 24 January 1958, Swedish Academy.
- 14) Letter from Howard S. Hibbett to the Nobel Prize Committee, Swedish Academy, 24 July 1961, Swedish Academy.
- 15) Letter from Donald Keene to the Nobel Prize Committee of the Swedish Academy, 25 January 1963, Swedish Academy.
- 16) パステルナークの選考とその後の反響に関しては、以下を参照。『ノーベル賞文学全集』第14巻(主婦の友社、1971年)、6-10頁。『ドクトル・ジバゴ』だけが授賞理由となった訳ではなかった。
- 17) Utlåtande av Svenska Akademiens Nobelkommitté 1958 jämt särskilt yttrande, Svenska Akademien, s. 4.
- 18) 前掲拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル文学賞と日本、1958～1967年の日本人候補に関する基礎的研究——」、

(2・完)、20頁。『蓼喰ふ虫』の英語版とスウェーデン語版は1955年に出版されている。『細雪』の英語版は、1957年に出版されている。

- 19) Utlåtande av Svenska Akademiens Nobelkommitté 1960 jämt särskilda yttranden, Svenska Akademien, s. 12.
- 20) *Ibid.*, s.11.
- 21) 前掲拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル文学賞と日本、1958～1967年の日本人候補に関する基礎的研究——」、(2・完)、14～15頁。この資料収集の段階で、1960年4月、外務省の担当官が谷崎を訪問している。谷崎の口述筆記者であった伊吹和子は、以下のように記録している。「九日、外務省から電話で、今年のノーベル賞の有力候補に先生の名が上っていると知らせがあり、十一日には係の人が出向いて来られるとあって、先生は三月一日の発病以来初めてお風呂に入り、四月十日、一応、『床払い』ということにされた」(伊吹和子『われよりほかに——谷崎潤一郎 最後の十二年——』講談社、1994年、271頁)。当時、谷崎は「一過性脳虚血」の発作を起こして療養中であった。
- 谷崎の日記には、1960年4月11日、「午後二時半外務省前田氏来訪、朝発病以来始めて風呂に入つた。……外務省からの来訪の件について相談するため嶋中氏に来訪願ひたい旨電話したところ、夜十時過來宅された。一時間程で辞去、熱海に泊られる」とあり、さらに翌4月12日には「午後二時過嶋中氏、昨日の件につき来訪、四時前まで」と記されている(「日記(四)自由日記」『谷崎潤一郎全集』第26巻、中央公論新社、2017年、120頁)。「嶋中氏」とは、谷崎の作品を多数出版している中央公論社の社長、嶋中鵬二である。この件に関して、谷崎はすぐに出版社の協力を仰いだのである。
- 日本外務省の記録でも、同年4月21日付けで本省が松井在スウェーデン大使に進捗状況を説明する中で以下の通り記している。「わが方において極秘裡に直接、別々に谷崎、西脇両氏に貴信の趣を説明したところ、両氏の快諾を得たので、目下両氏の協力を得て必要資料を収集中」とある(「極秘 情文第47号、昭和35年4月21日、藤山大臣発在スウェーデン松井大使宛、ノーベル賞受賞候補者に関する件」『ノーベル賞関係雑件』外務省外交史料館)。起案者は前記の「前田氏」である。以上のように、1960年のノーベル文学賞をめぐる松井在スウェーデン大使、外務省本省、谷崎、出版社が積極的に協力したことがわかる。
- 22) Junichiro Tanizaki(1960); Junzaburo Nishiwaki (1960), Swedish Academy. 内容は外務省史料と同一であり、そのまま利用されている。
- 23) Utlåtande av Svenska Akademiens Nobelkommitté 1961, Svenska Akademien, s. 9.
- 24) *Ibid.*, s. 6.
- 25) Utlåtande av Svenska Akademiens Nobelkommitté 1962, Svenska Akademien, s. 3.
- 26) Junichiro Tanizaki, Yasunari Kawabata, Junzaburo Nishiwaki (1962), Swedish Academy.
- 27) Utlåtande av Svenska Akademiens Nobelkommitté 1963, Svenska Akademien, s. 11.
- 28) *Ibid.*, s. 7.
- 29) *Ibid.*, s. 6 (sic).
- 30) Yasunari Kawabata, Yukio Mishima, Junzaburo Nishiwaki, Junichiro Tanizaki (1963), Swedish Academy.
- 31) Utlåtande av Svenska Akademiens Nobelkommitté 1964, Svenska Akademien, s. 4-6.
- 32) エステルリングは、“Five japanese tales”としているが、正確には以下の文献と考えられる。Junichiro Tanizaki, *Seven Japanese Tales*, translated by Howard Hibbett (New York: Alfred A. Knopf, 1963).『刺青』、『春琴抄』など7篇の作品が収録されている。
- 33) “Yttrande av Herr Österling,” Utlåtande av Svenska Akademiens Nobelkommitté 1964, s. 2.
- 34) Yasunari Kawabata, Yukio Mishima, Junzaburo Nishiwaki, Junichiro Tanizaki (1964), Swedish Academy.
- 35) Utlåtande av Svenska Akademiens Nobelkommitté 1965, Svenska Akademien, s. 7.
- 36) *Ibid.*, s. 5.
- 37) *Ibid.*, s. 5.
- 38) *Ibid.*, s. 6.
- 39) John Rohnström, “P. M.,” Tokyo, den 8 augusti 1965, Svenska Akademien.
- 40) 谷崎に対する欧米の関心は、谷崎の死後も続いている。たとえば、以下の国際シンポジウムの記録を参照されたい。アドリアーナ・ボスカロほか『谷崎潤一郎国際シンポジウム』(中央公論社、1997年)。千葉俊二、アンヌ・バヤール・坂井編『谷崎潤一郎——境界を超えて——』(笠間書院、2009年)。

付記

本年度をもって本学地域政策学部を定年退職される大河原眞美先生には、本学赴任以来、長い間、大変お世話になりました。ご指導、ご支援に対して心よりお礼申し上げます。ご研究のますますのご発展とご健勝を祈念いたします。

本稿は、2019年度科学研究費補助金(課題番号18K01471)による研究成果の一部である。